

研究要旨

好酸球性副鼻腔炎は難治性疾患である。手術方法や外来での管理は標準化されておらず、施設間で治療成績には差が存在すると考えられる。また各種薬剤使用や管理方法についても確立しておらず、治療のアウトカムが不明確なため、日常診療において多様な疑問点が存在する。

好酸球性副鼻腔炎の日常診療における不明確な点について、最適な治療方法を検討していくためにこれまでの症例を後ろ向きに検討し、難治化因子の解明などを行った。

A. 研究目的

好酸球性副鼻腔炎の日常診療における重症化に関連する因子を分析し、治療成績への影響を検討する。最終的には最適な治療方法の確立を目的とする。

B. 研究方法

①好酸球性副鼻腔炎に高率に合併する気管支喘息の診断、治療への耳鼻咽喉科医からの介入について、診断および鼻局所病態への関与についての検討を行った。

②自施設で手術加療を行った患者の長期予後を検討し、抗体治療薬が導入となった患者の背景、二次治療が必要となることを早期に予期しうるかについて後ろ向きに検討を行った。

（倫理面への配慮）

現在前向き研究は行っておらず、後ろ向き試験のみを施行している。そのため非侵襲的で患者に対する不利益などは生じる危険性はない。各研究についてはすべて倫理委員会の承認のもとで施行している。

C. 研究結果

①好酸球性副鼻腔炎患者を対象として、呼気一酸化窒素を用いてスクリーニングを行うことが未診断喘息の診断において有益であることを明らかにした。

②術後の長期経過観察中（中央値 3 年）に抗体薬もしくは再手術が必要となった患者が 17%存在しており、低年齢、術前 CT 値高値、術後 3 ヶ月の内視鏡所見が二次治療導入の指標となることが明らかとなった。

D. 考察

好酸球性副鼻腔炎は難治性・易再発性疾患であるが手術コンセプトや周術期治療の工夫により JESREC study が発表された当時よりも治療成績は向上している。しかし一定数の術後再発例は存在し追加治療を余儀なくされる場合は少なくない。予後不良患者を術前もしくは術後早期から予見することで、難治例に対して再手術や生物製剤の投与をスムーズに導入することが可能となると考える。

E. 結論

好酸球性副鼻腔炎に対する治療方針、予後推定因子について一定のエビデンス構築に寄与できたと考える。

F. 健康危険情報

当該研究に関連した健康被害は生じていない。

G. 研究発表

1. 論文発表

Akiyama et al. Assessment of eosinophilic rhinosinusitis cases that required secondary treatment (biologics or reoperation) during long-term postoperative courses. *Auris Nasus Larynx*. 2024;51: 167-173

秋山 貢佐 他. 好酸球性副鼻腔炎術後の嗅覚評価法による相違性. *日鼻誌* 2023;62: 129-134.

秋山 貢佐 他. 好酸球性副鼻腔炎患者に対する呼気一酸化窒素を用いた下気道スクリーニングの検討. *アレルギー* 2023;72: 288-294.

2. 学会発表

第 124 回日本耳鼻咽喉科総会. ECRS の未診断喘息検出における呼気一酸化窒素測定の有用性

第 48 回日本耳鼻咽喉科中国四国地方部会. 当科における好酸球性副鼻腔炎治療成績

第 62 回日本鼻科学会. 当科における好酸球性副鼻腔炎術後 Dupilumab 導入の実態

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし